

林業の仕事

にはさまざまな手入れを必要とします。

木を植えるまで

「地ごしらえ」という植栽の前の準備作業を行います。具体的には、伐採作業を終えた場所に残されている幹の先端部や枝などを集め、片付けたり整理したりするような行為です。

木を植えて育てる

目的や土地にあった木を植える「植栽（植え付け）」。春に植えるのが一般的です。その苗木が育つてくると植栽木の成長を妨げる雑草や雑木などを刈り取る「下刈り」という作業が必要になります。

苗木を植えてから10年ほどたつと、自然と周りに生えてきた樹木が成長の邪魔をすることがあります。この段階になると、成長を妨げる樹木や、植栽木の中で成長の見込みのない木を切る「除伐」を行います。

間引き

植えて10年を越えたあたりから、「間伐」という重要な作業が発生します。間伐とは、成長に伴って混みすぎた林の立木を一部間引く行為です。そのまま放置してしまうと幹が細くなり、強風などによる自然災害に対する抵抗力が低下します。間伐

をしないと、森林の持つ役割が果たせなくなるため、必要不可欠な作業の1つです。

- 間伐を行うことで次のようなメリットがあります。
- 残る木の成長を促進できる。
- 森林の中に光が差し込み、草や低木などの下層植生が生える。
- 土壌が保全される。
- 主伐までの間の収入源になる。

収穫作業

木材としての利用を目的に木を収穫するために、樹木の地上部をチェーンソーなどで切り倒すことを「主伐」といいます。

そして切り倒した樹木の枝を払い、木材の用途に応じた長さに切る「造材」、伐採地に散在する木材を一定の場所に集める「集材」、トラックなどにより市場などに運搬する「運材」といった過程を経て、木材は出荷されます。一本の立木から品質の異なる原木丸太が生産され、それぞれ異なる用途に利用されています。

なお、これらの作業ではハーベスタやプロセッサという高性能林業機械が導入され、生産コストの削減、重労働からの解放など、昔に比べて生産性は向上してきました。また、機械の導入が進んだことで、男女の体力差が問われない作業環境になりつつあります。

TOPIC

和歌山県の林業事情

和歌山県内で林業を営む人は、昭和30年（1955年）には1万4000人以上いましたが、平成22年（2010年）には約1300人に減少。なぜこれほどまでに減ってしまったのでしょうか。

それには高度経済成長期における輸入材の利用が背景にありました。

● 木材価格

国産材のスギ・ヒノキと輸入材のベイツガの木材価格を比べると、昭和50年（1980年）頃に国産材の値段は高騰したものの、今は輸入材の方が高くなっています。

木材価格の推移一覧表（全国・1㎡当たり）

年	国産材（スギ）	国産材（ヒノキ）	輸入材（ベイツガ）
昭和40年	1万4,300円	1万8,000円	1万2,900円
昭和55年	3万9,600円	7万6,400円	3万5,100円
平成2年	2万6,600円	6万7,800円	2万6,500円
平成30年	1万3,600円	1万8,400円	2万6,800円